



芥川龍之介

藪の中
芥川龍之介

検非違使けびいしに問われたる木樵きこりの物語

さようでございます。あの死骸しがいを見つけたのは、わたしに違いございません。わたしは今朝けさいつもの通り、裏山の杉を伐きりに参りました。すると山陰やまかげの藪やぶの中に、あの死骸があつたのでございます。あつた処でございますか？ それは山科やましなの駅路からは、四五町ほど隔たつて居りましょう。竹の中に瘦やせ杉の交まじつた、人氣ひとけのない所でございます。

死骸は縹はなだの水干すいかんに、都風みやこふうのさび烏帽子をかぶつたまま、仰向あおむけに倒れて居りました。何しろ一刀ひとかたなとは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳すほうに滲しみたようでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾かわいて居つたようでございます。おまけにそこには、馬蠅うまばえが一匹、わたしの足音も聞えないように、べったり食いついて居りましたつけ。

太刀たちか何かは見えなかったか？ いえ、何もございません。ただその側の杉の根がたに、縄なわが一筋落ちて居りました。それから、——そうそう、縄のほかにも櫛くしが一つございました。死骸のまわりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございません。何、馬はいなかったか？ あそこは一体馬なぞには、はいれない所でございます。何しろ馬の通かよう路とは、藪一つ隔たつて居りますか

ら。

検非違使に問われたる旅法師の物語^{たびほうし}

あの死骸の男には、確かに昨日^{きのう}遇^あつて居ります。昨日の、——さあ、午頃^{ひるごろ}でございましょう。場所は
関山^{せきやま}から山科^{やましな}へ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山の方へ歩いて
参りました。女は牟子^{むし}を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ萩重^{はぎがさ}ねら
しい、衣^{きぬ}の色ばかりでございます。馬は月毛^{つきげ}の、——確か法師^{ほうし}髪^{がみ}の馬のようでございました。丈^{たけ}でござい
ますか？ 丈は四寸^{よき}もございましたか？ ——何しろ沙門^{しゃもん}の事でございますから、その辺ははつきり存じ
ません。男は、——いえ、太刀^{たち}も帯びて居^おれば、弓矢^{きうや}も携^{たずさ}えて居りました。殊に黒い塗^ぬり籠^{えびら}へ、二十あま
り征矢^{そや}をさしたのは、ただ今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかようになろうとは、夢にも思わずに居りましたが、真^{まこと}に人間の命^{いのち}なぞは、如露^{にょろ}亦^{やく}如電^{にょでん}に違^{ちが}い
ございません。やれやれ、何とも申しようのない、気の毒な事を致しました。

検非違使に問われたる放免ほうめんの物語

わたしが搦からめ取った男でございますか？ これは確かに多襄丸たじようまると云う、名高い盗人ぬすびとでございます。もつともわたしが搦からめ取った時には、馬から落ちたのでございましょう、栗田口あわだぐちの石橋いしばしの上に、うんうん呻うなつて居りました。時刻でございますか？ 時刻は昨夜さくやの初更頃しよこうでございます。いつぞやわたしが捉とらえ損じた時にも、やはりこの紺こんの水干すいかんに、打出うちだしの太刀たちを佩はいて居りました。ただ今はそのほかにも御覧の通り、弓矢ゆみやの類たずさえ携たずさえて居ります。さようでございますか？ あの死骸しかいの男が持っていたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違いございません。革かわを巻いた弓、黒塗りの箆えびら、鷹たかの羽の征矢そやが十七本、——これは皆、あの男が持っていたものでございましょう。はい。馬もおっしゃる通り、法師ほうし髪がみの月毛つきげでございます。その畜生ちくしように落されるとは、何かの因縁いんねんに違いございません。それは石橋の少し先に、長い端綱はづなを引いたまま、路みちばたの青芒あおすすきを食くつて居りました。

この多襄丸たじようまると云うやつは、洛中らくちゆうに徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございます。昨年とりべでらの秋鳥部寺あきとりべでらの賓頭びんずる盧うしろの後の山に、物詣ものもうでに来たらしい女房めが一人、女の童わらわと一しよに殺されていたのは、こいつの仕業しわざだとか申して居りました。その月毛に乗っていた女も、こいつがあおの男を殺したとなれば、どこへどうしたかわかりません。差出さしでがましゅうございますが、それも御詮議ごせんぎ下くださいまし。

検非違使に問われたる媼おうなの物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附かたづいた男でございます。が、都のものではございません。若狭わかさの国府こくふの侍でございます。名は金沢かなざわの武弘、年は二十六歳でございました。いえ、優しい気立きだてでございますから、遺恨いこんなぞ受ける筈はございません。

娘でございますか？ 娘の名は真砂まさで、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬくらい、勝気の女でございますが、まだ一度も武弘のほかには、男を持った事はございません。顔は色の浅黒い、左の眼尻めじりに黒子ほくろのある、小さい瓜実顔うりざねがおでございます。

武弘は昨日きのう娘と一しよに、若狭へ立ったのでございますが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございましょう。しかし娘はどうなりましたやら、壻むこの事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥うばが一生のお願いでございますから、たとい草木くさきを分けましても、娘の行方ゆくえをお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸たじようまるとか何とか申す、盗人ぬすびとのやつでございます。壻ばかりか、娘までも………（跡は泣き入りて言葉なし）

×

×

×

たじようまる 多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問ごうもんにかけられても、知らない事は申されますまい。その上わたしもこうなれば、卑怯ひきような隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日きのうの午少ひるし過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子ひょうしに、牟子むしの垂絹たれぎぬが上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはそのためもあつたでしょう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩にょぼさつのように見えたのです。わたしはその咄嗟とつさの間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなどは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うばうとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀たちを使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派りつぱに生きている、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、

出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科やましなの駅路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫くふうをしました。

これも造作ぞうさはありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚ふるづかがある、この古塚を発あばいて見たら、鏡や太刀たちが沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪やぶの中へ、そう云う物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？ それから半時はんときもたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路やまみちへ馬を向けていたのです。

わたしは藪やぶの前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲かわに渴かわいていますから、異存いぞんのある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待っていると云うのです。またあの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理はありますまい。わたしはこれも実を云えば、思う壺つぼにはまったのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。

藪はしばらくの間は竹ばかりです。が、半町はんちようほど行った処に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合つごうの好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もつともらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう痩せ杉やが透ういて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎まばらになると、何本も杉が並んでいる、——わた

しはそこへ来るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩^はいているだけに、力は相当にあつたようですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括^くりつけられてしまひました。縄^{なわ}ですか？ 縄は盗人^{ぬすびと}の有難さに、いつ塀^{へい}を越えるかわかりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を頼^ほ張^おらせれば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片附けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも凶星^{ずぼし}に当つたのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠^{いちめがさ}を脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいつて来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛^{しば}られている、——女はそれを一目見るなり、いつのまに懷^{ふところ}から出していたか、きらりと小刀^{さす}を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈^{はげ}しい女は、一人も見ただ事ありません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹^{ひばら}を突かれたでしょう。いや、それは身を躲^{かわ}したところが、無二無三^{むにむざん}に斬り立てられる内には、どんな怪我^{けが}も仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸^{たじようまる}ですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀^{さす}を打ち落しました。いくら気の勝つた女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはどうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、——そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後^{あと}に、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのように縋^{すが}りつききました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥^{はじ}

を見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男につれ添いたい、

——そうも喘ぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました。（陰鬱なる興奮）

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷な人間に見えるでしょう。しかしそれはあ

なた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳を見ないからです。わたし

は女と眼を合せた時、たとい神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、——

——わたしの念頭にあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑しい色欲で

はありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつ

と逃げてしまったでしょう。男もそうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかったのです。が、

薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちを

しろと云いました。（杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです。）男は血相を変えたま

ま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太

刀打ちがどうなったかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫

きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思っ

ているのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——

どうです、あの女はどこにもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡あとも残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉のどに、断末魔だんまつまの音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早い、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐって逃げたのかも知れない。――わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪ったなり、すぐにまたもとの山路やまみちへ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後の事ごとは申し上げるだけ、無用の口数くちかずに過ぎますまい。ただ、都みやこへはいる前に、太刀だけはもう手放していました。――わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は櫓やうちの梢こずえに、懸ける首と思っっていますから、どうか極刑ごくけいに遇わせて下さい。（昂然こうぜんたる態度）

清水寺に来れる女の懺悔ざんげ

――その紺こんの水干すいかんを着た男は、わたしを手ごめにしてしまうと、縛られた夫を眺めながら、嘲あざけるように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶みもだえをしても、体中からだじゅうにかかった縄目なわめは、一層いっそうひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ぶように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟とっさの間あいだに、わたしをそこへ蹴倒しました。ちようどその途端とたんです。わたし

は夫の眼の中に、何とも云いような輝きが、宿っているのを覚りました。何とも云いような、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震いが出ずにはいられません。口さえ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃いていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑んだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう気を失ってしまいました。

その内にやっと気がついて見ると、あの紺の水干の男は、もうどこかへ行っていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛られているだけです。わたしは竹の落葉の上に、やっと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、——その時のわたしの心の中は、何と云えば好いかわかりません。わたしはよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうこうなった上は、あなたと御一しょには居られません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすって下さい。あなたはわたしの恥を御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は忌わしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂けそうな胸を抑えながら、夫の太刀を探しました。が、あの盗人に奪われたのでしよう、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし幸い小刀だけは、わたしの足もと

に落ちてゐるのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やっと唇を動かししました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えませんが、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑んだまま、「殺せ。」と一言云つたのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、ずぶりと小刀を刺し通しました。

わたしはまたこの時も、気を失つてしまつたのでしよう。やつとあたりを見まわした時には、夫はもう縛られたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交つた杉むらの空から、西日が一すじ落ちてゐるのです。わたしは泣き声を吞みながら、死骸の縄を解き捨てました。そうして、——
そうしてわたしがどうなつたか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしてゐる限り、これも自慢にはなりますまい。（寂しき微笑）わたしのように腑甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわたしは、一体どうすれば好いのでしょうか？

一体わたしは、——わたしは、——（突然烈しき歔歔）

巫女みこの口を借りたる死霊の物語

——盗人ぬすびとは妻を手ごめにする、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。体も杉の根に縛しばられている。が、おれはその間あいだに、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真まに受けるな、何を云つても嘘と思え、——おれはそんな意味を伝えたいと思った。しかし妻は悄然しやうぜんと笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬ねたしさに身悶みもだえをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ、——盗人はとうとう大胆だいたんにも、そう云う話さえ持ち出した。

盗人にこう云われると、妻はうつとりと顔を擡もたげた。おれはまだあの時ほど、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有ちゆうゆうに迷っている、妻の返事を思い出すごとに、嗔しん恚いに燃えなかったためしはない。妻は確かにこう云った、——「どこへでもつれて行って下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの間やみの中に、いまほどおれも苦しみはしまい。しかし妻

は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、たちまち顔色^{がんしよく}を失ったなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられません。」——妻は気が狂ったように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のように、今でも遠い闇の底へ、まっ逆様^{さかさま}におれを吹き落そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるか？ 一度でもこのくらい呪わ^{のろ}しい言葉が、人間の耳に触れた事があるか？ 一度でもこのくらい、——（突然^{とつぜん}迸^{ほとと}るごととき嘲笑^{ちやうしやう}）その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの人を殺して下さい。」——妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋^{すが}っている。盗人はじっと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴^{けたお}りに蹴倒された、（再び^{ふたたび}迸^{ほとと}るごととき嘲笑）盗人は静かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやった。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事はただ領^{うなず}けば好^よい。殺すか？」——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦^{ゆる}してやりたい。（再び、長き沈黙）

妻はおれがためらう内に、何か一声叫^{ひとこえ}ぶが早い、たちまち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟^{とつさ}に飛びかかったが、これは袖^{そで}さえ捉^{とら}えなかつたらしい。おれはただ幻のように、そう云う景色を眺めていた。

盗人は妻が逃げ去った後^{のち}、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄^{なわ}を切った。「今度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまう時に、こう呟^{つぶや}いたのを覚えている。その跡はどこも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声がする。おれは縄を解きながら、じっと耳を澄ませて見た。

が、その声も気がついて見れば、おれ自身の泣いている声だったではないか？（三度、みたび長き沈黙）

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光っている。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさだろう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに来ない。ただ杉や竹の杪に、寂しい日影が漂っている。日影が、——それも次第に薄れて来る。——もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまわりには、いつか薄闇が立ちこめている。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を抜いた。同時に
おれの口の中には、もう一度血潮が溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまった。
……

（大正十年十二月）

底本・・「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第8刷発行

底本の親本・・「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

※底本の中見出しは、ゴシック体で組まれています。

入力・・平山誠、野口英司

校正・・もりみつじゅんじ

1997年11月10日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル・・

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。